

# 私たちの流儀

「明日」を見つけた先輩医師からのメッセージ

## 院長の“定番スタイル”はアロハシャツと時代劇の主人公

〔第10回〕

### 新村 浩明

公益財団法人ときわ会常磐病院 院長



福島県いわき市にあるときわ会常磐病院。院長で泌尿器科医の新村浩明医師は、手術と診察の時を除くと、ふだんはアロハシャツ姿で仕事をしている。しかも、ユニフォームとして身にまとうのは、鮮やかなアロハシャツにとどまらない。月に一度、ちょんまげにはかま姿といった日本の時代劇の主人公などに扮装して、ボランティアで高齢患者宅を訪れ、見回り活動もおこなう。派手で、奇抜で、けれど、ユーモアもたっぷり感じられて……。そんな院長スタイルの内側に、新村氏のどんな思いや考えが隠れているのか。常磐病院でじつくりと話を聞いた。

取材／文 成島香里 写真 渡辺七奈 所属役職は取材当時（2019年3月）のもです。

#### 新村 浩明（しんむら・ひろあき）

1967年生まれ。富山医科薬科大学（現・富山大学）医学部卒業。東京女子医科大学腎臓病総合医療センター入局後、同センター泌尿器科助手となり、2005年東京女子医科大学大学院卒業。同年9月、医療法人社団ときわ会いわき泌尿器科へ赴任。11年6月より公益財団法人ときわ会常磐病院に勤務。15年9月から現職。日本泌尿器科学会専門医・指導医、日本泌尿器内視鏡学会泌尿器腹腔鏡技術認定医・泌尿器ロボット支援手術プロクター、日本内視鏡外科学会技術認定医、日本透析医学会専門医・指導医、日本臨床腎移植学会認定医、日本移植学会移植認定医、日本核医学会PET核医学認定医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医。医学博士。

#### 新村 浩明氏の主な論文

- Modified Clown Therapy using Traditional Japanese-style costumes for Elderly Patients in Post-disaster Fukushima. Kanemoto Y, Tanimoto T, Shimmura H. QJM. 2019 Feb 18.
- Whole body counter assessment of internal radiocontamination in patients with end-stage renal disease living in areas affected by the Fukushima Daiichi nuclear power plant disaster: a retrospective observational study. Shimmura H, Tsubokura M, Kato S, Akiyama J, Nomura S, Mori J, Tanimoto T, Abe K, Sakai S, Kawaguchi H, Tokiwa M. BMJ Open. 2015 Dec 7;5(12).
- Impact of the Great Eastern Japan Earthquake on transplant renal function in Iwaki city, Fukushima. Shimmura H, Kawaguchi H, Tokiwa M, Tanabe K. Transplant Proc. 2014;46(2):613-5.
- Role of anti-A/B antibody titers in results of ABO-incompatible kidney transplantation. Shimmura H, Tanabe K, Ishikawa N, Tokumoto T, Takahashi K, Toma H. Transplantation. 2000 Nov 15;70(9):1331-5.

### 地域住民との交流が大きな狙い

インタビューに応じる際も、新村氏はアロハシャツで颯爽と現れた。

「医師になって初めて訪れたハワイで、ショッピングセンターの店員さんに呼び止められ、『おまえにはこれが似合う』って言われるままに買ってしまったのが、茶色の古着のアロハシャ

ツでして。それが僕とアロハシャツの最初の出合いなんです。ただ、その時は、自分がいわきで働くようになる前は、もうまったく、思いもしませんでした」

福島県いわき市には、映画『フラガール』の舞台にもなったスパリゾート「ハワイアンズ」がある。2005年に大

学病院からいわきの泌尿器科クリニックに赴任した新村氏は、10年後、ハワイアンズと目と鼻の先の常磐病院で院長を務めることになったのだ。

「フラシテイいわき」というキャッチコピーでまちづく

りを進めている地域の病院なので、『アロハシャツを着る』ことをテーマにした

ら、まちおこしにもつながるし、なにより当院をPRする特色の一つになるんじゃないかって、イメージが湧いてきましてね。院内で着てみたら自分の中でだんだんしっくりくるようになって、で、『毎日アロハシャ

を着ている院長」というのが定着していききました。振り返れば、ハワイでアロハシャツを初めて買った、あの場面が原体験になっていて、その茶色の古着もいまだに着ています」

人の目を引く新村氏のユニフォームは、ほかにもある。それを身にまとうきっかけになったのは、院長に就任する前年のクリスマスの日の出来事だった。

「訪問診療に行こうとして、院内の事務室に寄ったら、ハンガーにサンタクロースの衣装がかかっているのを見つけたんですよ。『今日は25日だから、これ、着て行っちゃおうかな』っていう感じで、サンタクロースの扮装で、お年寄りの家を回りました。そうしたら、最初は皆さんビックリされて、でも、気心の知れた泌尿器科の患者さんたちなので、どの家庭に行っても『わあー』っていう反応になって、すごく喜んでくれました。一度きりのつもりが、『1月は大黒様でお願いね』みたいなリクエストが出たので、それならと年明けは大黒様の格好をして訪問したんです」

以来、月に一度、今はボランティアとして、日本の時代劇の主人公などに



泌尿器科診療の実績を足かりに、他の診療科の充実も図る常磐病院。

なりきった新村氏が、毎回5、7件の高齢患者宅に向いて、聞き役に徹する見回り活動を続けている。

その扮装に必要なものはすべて、着物にはじまり、かつらも、小道具も、東京の芸能関係の貸衣装屋からレンタルする徹底ぶりだ。

「僕は富山県出身でよそから来た人間です。なので、いわきの住民の皆さんともっともつと交流を深めたい、という気持ちです。それが、地域の人たちとの距離が縮まる実感をもてたんです。すご

仮装は本格的。毎回、看護師と連れ立って患者宅を訪問する。患者さんからは大好評だ。（写真提供：常磐病院）



## 「二山一家」の精神と その実践に魅了される

2005年、東京女子医科大学泌尿器科の医局員だった新村氏は、ときわ会グループ（常盤峻士会長）が運営する、いわき泌尿器科に期限つきで派遣された。

ときわ会の理念は「一山一家」。同グループ発祥の地であるいわき市は、かつて炭鉱で栄えた街だ。一山一家は、炭鉱にかかわるすべての人が家族であり、強い連帯意識で結ばれているという思いからきた言葉で、それにならって、ときわ会も「地域の人々とともに生きる」ことをモットーに、「従業員とその家族の健康、そして住民一人ひとりの健康を支え、活力ある地域社会の構築に貢献する」と謳っている。「理念を具現化するように、常盤会長は、職員も、地域住民も、外部の例えば業者の方も、非常に大切にされるんです。思いやりをもつて接します。その姿勢にすごく感銘を受けて、『このまま常盤会長と一緒に働きたいな』という気持ちが生えてきたんです。いわきに残ると決めたのは、こちらに来て1、2年たったころですかね。僕の決断に派遣元の医局員はみんな驚いていました」



ときわ会の基本理念「一山一家」が常磐病院の玄関に掲げられている。

いわきで泌尿器科医の仕事を続けることに、新村氏が「少しの迷いもなかった」と言い切るのには、もう一つ、理由がある。

「いわき市は、人口が35万人ほどですが、当時、地域医療連携の中核病院の泌尿器科が閉鎖されたりして、人口のわりには泌尿器科診療が充実しているとはいえない状態でした。だから、これは僕自身が手術をきちんとおこなえば、数多くの症例にかかわることができると、読みが、働いたんです。そして、いつか、絶対、いわきで大病院に負けないぐらいの泌尿器科チームをつくりたいと思いました。そうしたら、泌尿器科医である常盤会長も同じことを考えていらつしやったんです」

「ああいう危機的な状況の時に、常盤会長の人脈の広さがまさに功を奏したんです。それを目の当たりにして驚嘆しましたし、会長のふだんからの人への心配りや面倒見のよさが、生きてくることもよくわかりました。それに、職員のチームワークも相当なものでし



「いわきで泌尿器科医を続ける」。その決断の理由を語る新村氏。

た。「常盤会長の元でなら頑張らなきゃ」。職員をこんな気持ちにさせてしまうんですよ。そういう人間の魅力を身につけたい。僕の大きな課題なんです」

## 臨床をしっかりとこなうことが 自身の支え

今、常磐病院（病床数一般150床・療養90床、透析148床）でもっとも充実した診療体制をとっているのは、新村氏が率いる泌尿器科で、すべての泌尿器疾患を扱う。

2012年には手術支援ロボット「ダヴィンチ」を導入。泌尿器がんを対象にしたロボット手術は、年間150例ほどを数え、年々増加している。5人の常勤医師だけでは、泌尿器科全体の手術対応がとつてい間に合わず、東京女子医大や東邦大、順天堂大から定期的にサポーターに来る非常勤医師は30人近くに上る。

一方、看護部では、EPA（経済連携協定）に基づくベトナム人看護師候補者を受け入れていて、これまでに5人が国家試験に合格。常磐病院の看護師として働いている。

これらの取り組みとならんで、ときわ会は16年、院内に「先端医学研究センター」を開設。目下、3人の専任研究員が、地元の医療創生大学薬学部などと連携し、がんをはじめ各種病態の発症要因や機序にかかわる基礎研究、臨床研究を進めている。資金は福島県の復興関連事業の予算からも充てられた。

「こういった多様性を組織として大事にしつつ、泌尿器科の活動を足がかりに、さまざまな診療科の医師を増やし、将来的には、ある程度、ブランド化して、首都圏から患者さん呼び込めるような常磐病院をつくりたい。それが、ときわ会のこれからの夢なんです。なぜなら、今はまだ震災の影響でいわき市の人口が増え、高齢化も進んでいるので、患者さんを確保することができます。でも、あるところで、日本は働き手も高齢者も減少すると予測されている。そうなったら、当院のような規模の病院は、現状維持のままで生き残れないからです」

先を見すえた時、院長としての自身の責任が、非常に重いことを痛感するという。そして、若い職員が増えるなかで、一山一家の精神を、職員たちにもどう伝えていけばいいのか。こちらにも



病棟の看護師にとっても院長のアロハシャツ姿は当たり前の光景になっている。

「たやすいことではない」と思っている。「もしかししたら、アロハシャツを着ていたり、頭にちょんまげを載せたりすること、目立ちたがりの院長で大丈夫かなあ」などと、冷やかに見ている職員がいるかもしれません。でも、僕自身は「臨床をしつかりおこなう」という信念をすうっともち続けていて、その覚悟があるからこそ、外見上のスタイルにも趣向を凝らして活動ができるわけです」

見た目の派手さと揺るぎない信念と。「この落差が、ある意味、僕の院長としての特徴でしょうか」

## 10年後、新村先生は 自分が何をしていると思いますか？

「10年後も、アロハシャツを着て、頭にちょんまげを載せて、手術もバリバリやって、今とまったく変わらないスタイルだと思います。そうありたいです。実は、当院には温泉を引いた職員専用の展望浴場があるんですよ。それから、ときわ会は、看護師ら職員の子ども（児童）のための学習塾も開いています。また、例えば、週末に遠方から来てくださる非常勤医の先生方には、当院の若手医師との交流も兼ねておいしいお寿司をまずは食べていただいてから仕事に入っていたくなど、できる限りのおもてなしを心がけています。当然ながら、これらも一山一家の考えが基にあり、働く人にとっても居心地のいい病院を、これからもめざしたいです」



取材者・成島香里（なるしま・かおり）

上智大学社会福祉学科卒業。山梨日日新聞社、保健同人社を経て、現在は医療・健康を中心に取材するフリーライター。著書に『医者自分の病気を治せるか』、インタビューとして『知らなかったあなたへ―ハンセン病訴訟までの長い旅』（ともにポプラ社）がある。東京理科大学非常勤講師。